



>>> 仕事

私のキャリアデザイン <<< 第5回

東京から北海道へ家族で 移住し、地方公務員に

私は10年ほど前に中途採用で旭川市役所に入庁し、住み慣れた東京から北海道へ移住しました。最近では、専門的な知見を求めて様々な行政機関で社会人を中途採用していると聞きます。また、コロナ禍を経て、多様な働き方や暮らしの選択肢が広がり、地方への関心も高まってきています。私の体験談が、公務員転職や地方移住のビフォーアフターとして、少しでも参考となれば幸いです。

新卒で保険会社に勤務

私が新卒で損害保険会社に入社した1990年代後半は、金融当局による護送船団方式から自由化の時代へ移行する激動の時代の入り口でした。損害保険会社と生命保険会社の相互参入が始まり、2000年代に入ると経営統合でメガ損保が生まれ、その後の新興のネット保険の台頭へと繋がっていきます。

その頃、私は外資系保険会社に在籍して

いましたが、自身の成長のため次の転職先を探していました。そんな時に出会ったのが、50代以上のライフスタイル雑誌を発行する出版社でした。高齢化社会が進む中、読者が本当に知りたい情報を発信、発行部数は最高43万部に達し、超高齢の現役医師による連載は単行本化され、ベストセラーになりました。保険会社で契約者サービスのパンフレット制作に携わっていた私は、その雑誌の有名編集長の下で働きたいと考えていたのです。

運良く採用されたのですが、配属先は雑誌の読者向けの共済事業を行う部署でした。保険会社での経験を評価されて、採用になったと後で聞きました。というのも、その出版社では共済事業を分社化して、少額短期保険会社を立ち上げようとしていました。少額短期保険会社は、2006年の保険業法改正により生まれた、「少額」で「短期」の保険を扱っている会社です。



旭川市中央図書館事務係主査
坂口 稔

大学卒業後、損害保険会社等で働き、現在は旭川市職員として図書館に勤務。前橋市、富良野市、浦安市、茅ヶ崎市、中野区で暮らした後、2016年4月に妻の実家のある旭川市へ1ターン。家族は妻と娘二人。

雑誌制作への憧れはありましたが、会員誌発行やイベント開催など、雑誌同様に読者との繋がりを大事にする企業文化が魅力で、また一般の保険会社では得られない、ベンチャー企業のような可能性も感じていました。その当時、社員は10名ほどでしたが、年代的にも私は若いほうで、上司や先輩たちと新しい会社づくりに参加しているところにやりがいを感じました。

保険は金融商品ではありませんが、形がなく、一連のサービスそのものが商品です。競争激化する新規契約の獲得コストに比較して、契約更新は低コストなため、収益拡大にとって大変重要となります。私はリーフレットの改訂やコンビニ収納システムの導入などに関わり、契約更新率の向上に努めたほか、新商品のシステム構築に向けた業務フローの作成等、商品づくりに従事しました。

2011年に発生した東日本大震災では、電車が止まり会社で寝泊まりする中、顧客の安否確認や保険料猶予など特別対応



に携わり、保険の持つ公共的な意義を感じました。同じ頃、私生活でも長女の誕生という大きな変化がありました。それを機に、仕事と家庭とのバランス、向き合い方についても考えるようになりました。

●●● 巨大金融グループの一員に、 ●●● そして退職へ ●●●

2013年に転職が訪れました。勤務していた会社が、株式取得により、ある巨大金融グループの一員となったのです。資本強化やグループ提携により、会社は一層大きく成長しました。一方で、コールセンターは外部委託され、顧客との接点は遠くなりました。家族的な雰囲気は失われ、合理的な企業文化に馴染まないものは切り捨てるような雰囲気があり、良くしていただいた人たちが会社を去りました。

そんな中で、部長職にまで取り立ててもらっていた私は、複雑な思いでした。巨大金融グループから新しい人が次々と入り、組織が変わっていく中、どこを向いて仕事をすれば良いのか、わからなくなりました。気付けば社会に出て20年、定年までの時間のほうが短くなっていました。自分の力を活かせる場所で自分らしく働きたい、と思いつつ日々が続きました。

そんな時に、妻から実家のある旭川市で新しい職員採用試験が始まると聞きました。それは「地方創生特別枠」と言い、北海道外で社会人経験があり、旭川市へ移住

する意欲のある人を採用するというものでした。次女が誕生し地方の子育て環境への関心がありましたし、学生時代の就職活動で公務員を志望した頃の気持ちを思い出して、受験することを決めました。

合格した後も、自分が生まれ育った東京を離れることにはかなり悩みました。しかし、一度きりの人生、新たな道を試したい、家族との時間ももつと持ちたいという思いで決断しました。こうして2016年4月、旭川市へ移住し、市の職員となりました。

●●● 社会人となって20年目に ●●● 北海道・旭川市へ家族で移住 ●●●

旭川市は北海道のほぼ真ん中に位置し、大雪山連峰に囲まれ、石狩川を始め多くの川が流れる緑豊かな自然あふれるまちで



市内を流れる石狩川から大雪山連峰を望む

す。北海道米のほか、旭川ラーメンや豚ホルモンなど美味しいものもたくさんあります。人と人、人と地域の距離が近く、移住者など外から来た人も頑張っていれば応援してくれる、そんなまちです。

最初に配属された地域振興課は新設された部署でした。移住促進や中心市街地活性化など地方創生業務を主に、関係部局との調整等の業務を担当しました。と書いてみましたが、それはなかなか大変な毎日でした。

収益性や成長性を重視する民間企業とは異なる行政組織の文化や風土を理解するとともに、ゼロから人間関係を築く必要がありました。旭川市に限らないでしょうが、役所は基本的に新卒採用が大部分で、中途採用はまだまだ少ないです。新人として仕事を覚えて実績を重ね、先輩後輩や上司との信頼関係を築き、数年に一度の異動を経て仕事の幅を広げ、質を高めていくという一般的なキャリアプランがある中で、自分はどういうキャリアを築いていけば良いのか、役所では新人の自分がどのように民間経験を活かせるのか、答えの見つからない問いに自問自答していったのです。

そんな中、職場には、公私にわたり特に良くしてくれる人がいて、庁内外の豊富な人脈を活かし、会議や飲み会などで色々な人を紹介してくれました。私のバックグラウンドも含めてそのまま受け入れていただいたことが、本当にありがたかったです。特に移住促進に関わる業務では、私自身が移住者で

あることや前職の経験を最大限に尊重していただき、移住戦略にマーケティング的な視点を取り入れることや移住者アンケートなどの提案を受け入れてもらえました。

東京で移住イベントを開催したり、市内に住む移住者の会を開催したりと、今思い出しても楽しい思い出です。また、その活動を新聞や雑誌などに掲載していただいたり、学会にも呼んでいただき講演したりと、なかなかできない体験をさせていただきました。保険会社時代に取得したファイナンシャルプランナーの資格や人脈も活かすことができました。

地域振興課には5年間在籍しましたが、移住者という立場が業務面での自身の強みとなる点で、働きがいのある職場でした。また、妻や子どもに自分の仕事の一端に触れてもらう機会があり、家族とも良い時間を過ごすことができました。

公務員の異動は「転職」とよく言われます

公務員は異動すると、新たな人間関係の構築はもちろん、部署により異なる関係法令・制度等を一から勉強しなければなりません。「ゆりかごから墓場まで」という言葉がありますが、人の一生に寄り添う行政の仕事は本当に幅広いと感じます。

最初の異動先は行政改革課でした。民間活用により全庁的にコスト削減するという課題があり、施設の民間委託や指定管理に

向けたサウンディング調査などを実施しました。行革本部会議の運営や規則改正などの内部管理的な業務に携わることができました。ちょうどコロナ禍の真っただ中で、DXによる業務効率化の取組が進んだ時期でした。保健所の健康観察などの応援業務もあり、市民の安心安全な暮らしを守るという役所の本来的な意義を感じることもできました。

その後に配属された産業振興課では、外郭団体の産業支援機関に派遣という形で、中小企業の経営改善、販路開拓、創業相談等に従事しました。担当エリアが南は富良野市から北は稚内市まで300kmと広範囲で、時には泊まりがけの出張で対応しました。事業者の状況はケースバイケースで、制度改正の多い税制や補助金など幅広い知識が求められ、勉強の日々でした。地元の名産品を原料とした商品で起業する事業者も多く、この地域の可能性を感じるとともに、商品の試食のような経験もさせていたできました。

次に配属となった土木総務課では、初めて契約事務などの庶務を担当したほか、事務局として石狩川の治水や道路建設などの要望書をまとめ、市長に随行して中央省庁に出向き、意見交換などを行いました。土木は市役所の中でも北海道や国との繋がりが強く、また周辺自治体との連携もあり、細かな調整が求められることが多く苦勞しました。

現在は図書館に配属され、まだまだ勉強

中の身ですが、業務効率化や財源確保などに取り組みたいと考えています。文化的な施策は効果測定に難しい面があり、厳しい財政下では予算の確保が課題ですが、図書館の持つ膨大な知のコンテンツは、個人の人格形成や自己実現に向けて大きな影響力があります。読書離れや利用者ニーズの多様化といった変化にも対応しながら、いつでも市民に親しまれる図書館であるよう、持続可能な図書館運営を目指して頑張りたいと思っています。

社会人となって30年、良い時も悪い時もありました

順風にして驕らず、逆風にして腐らず

大学時代に打ち込んだヨットにも通じるものとして、新卒の損害保険会社勤務時代から大事にしてきた言葉です。今は順風なのか逆風なのか、風をどう捉えるかは自分次第。風がない時も帆を揚げ続けているか。たとえ逆風であっても、揚力度45度までは上っていくこともできる。深い言葉だと思います。

旭川市へ移住して公務員にならなければ得られなかった経験をたくさんさせていただけました。これからもこの地域の未来のために、仕事はもちろんプライベートにおいても様々なことに興味を向けて、自分らしく、進んでいきたいと思っています。